

ともに学ぶ《青二才・赤っ恥》

一徹国語人

先生は教える人。児童は教わる人。そこで、教わる人の学びがより楽しく分かりやすくできるように、先生方も常に学び続けていく。学校のあるべき姿の原点である。

今年の五月一日、神奈川県は大阪府の人口を抜き、東京都に次ぐ大規模県となった。六月に入って、その神奈川県最大の都市、横浜市のある学校で「調べたことを整理して書く」という五年生の授業を観た。

単元の設定主旨を指導書で読むと、「これまでの国語の学習を通して、児童は言葉についての多くのことを学んできた。それらは児童自身の生活や学習

を通して自然に、あるいはその時々話題に応じて体験したり身につけてきたものである。」とある。

（※破線は筆者）

ただ、全国を旅して学校訪問していると、最近の子どもたちの言語感性は、素朴な日常生活の中で育まれてくるものよりも、TVや雑誌を中心とした情報や柱とした言葉のやりとりによって造成されたもののほうが多くなっているように感じる。指導書に書かれていることが、すべての児童の実態に当てはまると言えないのだ。また、大都市と地方とでは、習得される語類にも違いがあるように感じられるし、同じ語でもその示す広さや深さ・確かさ

において違いが出てきているようにも思える。

五年生のこの時期（六月期）に言語をまとめて対象化し、課題を設定してとらえ直してみるのには、大変によいことである。

この学級では、単元の導入（一時限目）として、教科書のP38を全児童に一度黙読させ、さらに一度微音読させていた。音読によって学習の目的を理解させた上で、各人の日常生活を振り返らせ、『家の人がよく使っている言葉・よく分からないが知っている言葉・調べてみたい言葉』を出させるのである。

あまり多くは出ないであろうという

予想に反して、びっくりするほど多くの言葉が出た。

擬態語・擬声語・四字熟語・故事名言・格言・ことわざなど領域も広かったし、数も多かったが、元字を知らず仮名書きで出たものがありあった。なかには、「青二才」「赤っ恥」「はら黒い」といった色に係った言葉や、「いっぱし（二端）」「ふたまた（二股）をかける」「さんまい（三昧）」といった数の入った言葉なども出て、感心させられた。

そして、児童一人一人が短冊（縦半折大）にソフトペンで一語句ずつ書き出したものを教室の壁いっぱい貼り出して、全員で見比べる学習が、導入学習のまとめとなった。

三十二名の児童が壁に貼った短冊は二百枚ほどであったので、一人平均六語句を書き出したことになる。これだけ出れば、次時（二次の一時限目）のP39にある連想文図学習は楽しく展開することができそうである。

ただ少し心配なことは、調べ学習も確かにでき、見事に「言葉の研究レポート」をまとめあげることができたことである。出された二百ほどの語句とそれに連続する語句群の多くが、生活の中でしっかりと身についたものであればよいのだが、知的操作だけに終わらぬような配慮があればいいのだが、とつい思ってしまう。

小手先の技術だけが身につけてしまいはせぬかと、そのことばかりが気になるのは、私が歳をとったからなのだが、しっかりと研究レポートをまとめあげた児童が、長じて社会へ出てから《青二才が赤っ恥をかく》ようなことをいくつも重ねた上に、そのことに鈍くなってしまうたら残念でならないものとなる。

それにしても、大都市部でのこの難しい言語単元の導入を楽しく展開できたのは、児童の実態把握の正確さと教材分析・指導計画の細やかさにあったからだと思わずにはいられない。つま

り、児童の学びの前に教師がしっかりと学び、その上で児童の学び（想のゆらぎに合わせつつ）とともに学んでいく姿勢がこの単元の学習を深いものにしていったように思われる。

この学級は、指導書に例示されている十時限・十二時限よりも長く十三時限でこの単元を展開する計画であるが、これからは、何を見ても何を聞いても、読んでも、言葉のおもしろさや不思議さに興味をもち、調べてみようとするにちがいないと思えた授業であった。

一徹国語人にご意見・ご質問がある方は、広報部までお便りをお寄せください。
一徹国語人がお返事をいたします。お便りは、誌上にて紹介させていただきます。
FAX: 03-3493-5483
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp